

---

# F E E L

雪見

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F E E L

### 【Nコード】

N 5 0 8 5 F

### 【作者名】

雪見

### 【あらすじ】

如月市にある黒崎探偵事務所。そこに所属する比島幸祐を中心に、“欲望覚醒者”・“魔法使い”といった非現実的な者達が織り成す物語。幸祐の過去。そしてそれを知ってしまった黄神夜。略奪嗜好に染まってしまった茜城和貴。全てはこの三人の、一年前の出来事からはじまった……

## プロローグ：冷たい（前書き）

ギャグは無いと思います……。

グロあり

性的描写は無いですが、言語は登場します。（凌辱等）  
結構ひねくれた人物が登場します。

## プロローグ：冷たい

目が覚めて、最初にこの眼が写したのは誰もいない空虚な空間。現実には蘇生してまだわずかな脳が真つ白な天井を認識する。

起き上がってみた。いや起き上がって初めて、自分が仰向けに寝ていたという事実を知った。白いベットは不気味に心地よかった。不意に肩に何かが触れる。それは自らの髪。あの時はまだ耳にも掛かっていなかったというのに、流し目で見た自分の肩には銀の髪が触れていた。

あの時。不覚にも思い出してしまった。脳はそれを拒む自身の意思に反し、記憶のメモリーからそれを見つけ出し、自分の脳という小さな映画館でそれを上映する。

冷たい、深海に堕ちていく自分という存在。冬の海は息苦しさより先に冷たさを訴えかけてくる。指先は痺れ視界は暗闇に誘われていくはずが、やけに純粋な白、白純に染まっていく。

最後まで感じていたのは 冷たい。ただそれだけだった……。

頭を抱えて呻いた。認めたくない現実が、再生したくなかった映像が、慈悲もなく、無情に脳内を駆け巡る。競走馬の荒々しさに似た、満月の面妖さに似た、喧噪。家族の笑い声が頭の中で木霊する。戻らないのに、帰ってこないのにそれは彼に語りかけていく。

やめてくれ。脳内で機械的に記憶を再生する器官に制止を求める。だが変わらぬ速度で、変わらぬ精密さで、一度真つ白になっ

た彼のページに、その軌跡を書き込んでいく。

やめてくれ

やめてくれ

やめてくれ

一瞬の硬直の後、彼は体の芯から心の芯まで、冷え切った。

思い出してしまった冬の海の冷たさ。そして気づいてしまった孤独の冷たさ。脳裏に浮かんだ家族の笑顔でさえ、彼を冷やす氷塊でしかなかった。大切だったあの陽だまりは、もう凍ってしまっているんだと。彼はもつとも残酷な現実を認識した。

力なく、仰向けにベットの倒れこむ。白い布の不気味さんは一段と増し、温もりのあるはずのそれさえも冷たく冷え切っていた。

少年の銀の瞳は空虚を捉える。いや空虚しか捉えられない。孤独な彼には捉えるべき対象はなく、必然的に空虚をその瞳に写す。

哀れで悲惨な彼の体は例外なく、全てが冷たかった。

## ブログ：冷たい（後書き）

今回はこの小説をお読みくださり真にありがとうございます。

これは今まで僕が考えてきたストーリーの中で一番上手く出来ていて、自信作なので今後もよろしく願います。

別サイトで更新しているものを加筆修正して載せているので、更新スピードは遅くなると思います。

## 第一章「殺人依存」・一話：意味探し

朝の日差しが窓から差し込み、俺の机を照らす。

ここは全国区でも有名な進学校、私立朝河岡高等学校。有名大学進学率一位を目指す教師どもの巣窟だ。

周りを見渡すと人形のような表情で参考書に目を落としている奴ばかり。こいつらは数学、物理、化学、生物学などの学問でしか自己を確立できない常識人。俺たちは異常者。あくまでこの小さな学校での常識だが。

この学校に俺のような奴は少ない。学問以外での自己の確立方法をする者。小難しい言い方をすると特殊な人間のように思えるが、一歩学校の外へ歩み出ると俺たちは常識という名の枠に吸い込まれていく。外界での異常者が常識人となる。それがこの学校。つまりこの学校にいる者のほとんどが、異常者なのだ。

俺は別の意味で、特殊なのかもしれないが。

そんな俺の椅子に一人の男が性急な足取りで向かってくる。ズボンははいている事から男と仮定したが、机に寝そべっている俺には男の顔が見えないので人物名は不明確だ。

「富原くん。参考書も読まずにひなたぼつことは余裕だね。そんなので次回のテスト僕に勝てるのかな？ まあ努力しても無駄だろう。今度こそは僕が勝たせてもらおうよ！」

苛立ちを含んだ口調でそう言って立ち去っていく男。名前は……串永とか言っただけ。

奴は二年に進級して以降、俺にテストで勝ったことが無い。話に聞くと一年のテスト順位も俺を下回っている。正直、どんなに手を抜いても奴にだけは負ける気がしない。

奴は人に関わろうとする者が少ないこの高校での異常者だ。だが塀から出て外常識に適應できない半端者。俺も同じ意味ではないがそれに分類される。

まあ、最後に付け加えると前回のテストでの俺の順位は二年の生徒280名中221位。これでお分かりだと思いが俺と串永は五十歩百歩。満員の東京ドームの中心で、カブトムシが一对一で戦うのと似ている。類義語で目糞鼻糞を笑うという下品なものもある。

そんな俺の下に……素足が見えるから今度は女か。ならあいつしかない。

「ゆうくん。おはよう！」

俺はその声に顔を上げる。朝っぱらからこんな大声を出すのは時<sup>ト</sup>谷<sup>キヤ</sup>冥<sup>メイ</sup>花。俺の幼馴染といったところか。

腰まで伸びた流麗な黒髪は気品を漂わせ、純粹で無垢な瞳は闇夜の中でも輝きだしそうな黒色。幼児のような笑顔を放つそれは整った顔立ちで、成人女性ようだ。

はつきりいつて上品と無邪気という二律背反が互いに闘ぎ合う事無く成立している、不思議な存在。それが冥花だ。流石にここまで矛盾していると、たまにこれが本性か？ 疑いたくなる事もあるが。

「おはよう。で何だ？」

「今度のテストどう？ 今度は私に勝てるのかな？」

無理を言ってくれる。こいつは大体50を切る順位をたたき出す。平均200位台の俺からすればランドキヤニオンをひも無しで登りきると同じ次元。生憎俺にロククライミングの趣味は無い。

返答を返すのが嫌で眼をそらした俺を見て、冥花は悪戯を思いついた子供のような笑みをこちらに向けてきた。



「もしかして……串永くんにも負けそう？」  
「なわけあるか！」

今まで静かだった俺が怒鳴ったからだろう。冥花は少し戸惑った表情で謝ってくる。怒鳴るなんてらしくないが、前述したとおりあいつには負けない。

プライドとかそういう類ではない。ただ惑星直列でも起こらない限り俺の敗北は無いということだ。

ここで余談だが、あいつが俺に勝負をかけてくるのはあいつが冥花に気があるからだ。だから幼馴染で仲の良い俺を眼の敵にしているのだが……冥花はそういう恋愛感情には乏しい。

遅すぎる春の到来を待たずに夏を受け入れたというところか。思春期という名の春は好奇心という名の夏に先を越されてしまった。下手をすればこのまま二十歳を過ぎるだろう。

まあそういう俺は他人の欠点を否定できない。俺も欠けた人間だ。存在理由という意味を、探している。

自分はなぜここにいるのだろうか？ 生きているから。そんなのは自分勝手なバカがほざく解答だ。

必要性。それを人は求め、手に入れる。

だが俺にはそれが見つからない。俺の存在理由という名の方程式はXⅡ という形にはまだならないのだ。それが有限なのか、無限なのか知らないが。

ホームルームを告げる鐘が鳴る。冥花は俺との短い話を切り上げて自分の席へつく。最近の俺の異常は、それにあるのだろうか……

今日という日は実に面白い。そう感じてしまう知らせが入った。

「今日からこのクラスに転入生が入る事になった。比島君、入って

きなさい」

抑揚の無い担任に促され、教室に入ってきたのは男。

肩まで伸びた髪は雪のように白く、金属のように鋭い。そして日光を受け、白銀の光を放つ眼。身長はこの際関係ない。その男は異質。そいつの頭上から日光とは違う別の輝きが降り注いでいると錯覚するほどだ。

圧倒的な存在感。俺が　今一番欲しているもの。

意味もなく唾を呑み込んだ。

組んでいた指の力がスツと抜ける。

瞼が閉じるという行為を忘れる。

俺は生まれて初めて、人に見惚れた。

この感情は、昔体験した事があった。だがまだ思い出せない。

「今日から皆さんと学校生活を共にすることになる比島幸祐です。一身上の都合によりこの学校に転入してきました。どうかよろしくお願いします」

ありきたりな挨拶でさえ神のお言葉と間違えるほど神々しさ。絶対的異質者。

俺の心には希望と憧れと驚きと、恐怖が生まれた。

彼は自分がひた隠しにしている事を白日の下に晒すのではないだろうか。その不安だった。

背筋を悪寒が走る。蜘蛛が歩いていくような、八本の足が背中の脆い部分を突き崩していくような感覚。

……隠したいこと。それは自らが　人殺しだという事

## 第一章「殺人依存」・二話：朝河岡猟奇殺人事件

住宅に囲まれている帰り道を歩く。道路のアスファルトは夕焼けに照らされ、鮮やかな橙色を放っていた。

いつもは俺と冥花の二人だけで歩く帰り道。なのだが、この日は転校生の比島という三人目の人物がいた。

楽しそうに話す二人。それを眺めながら俺は深くため息をつく。

何故、こんな事になったのだろうか、と。

理由は簡単だ。比島幸祐という人物が朝河岡と言う土地に引越してきたばかりで、迷うかもしれないからだ。それは転校生らしいものだが、彼の本心の半分だろう。もう半分は自己防衛意識からきたものだとは推測する。

物騒な話だが、朝河岡市内で連続猟奇殺人事件が続いている。これまでで三件だ。犯行時刻はいずれも深夜。凶器はナイフで、被害者の首本を一撃。それで人間という生物はいとも簡単に事切れる。そしてその後死体を解体し、それぞれの部品で様々な模様を描くという極めて猟奇的な内容だ。中には部品を通り越して、肉片になったものもあったらしい。

犯人は捕まっておらず未だに捜査は続いている。

俺は自分で言うのもなんだがガタイがいい。中学の頃はよく高校生と間違えられ、映画館では生徒手帳が必要だった。そして中学の部活で柔道。小学六年生までした空手。そこらの不良が十人程、束になっただけでかかってきても負ける気はしない。

そんな俺という事が防衛手段と思ったのだろう、この男は。

俺は比島という男を凝視する。今のこいつに朝のような神々しさは無い。そればかりか軟弱ささえ感じる。目つきは凜々しいという形容からはかけ離れ、にこっと緩んだ優しい目つき。発する言葉は全てが丁寧語で、異質という雰囲気は漂ってこない。カメレオンのように擬態をした感じも無い。俺はこいつという人物を見誤ったか？

そんなことを考えている内に、帰り道は分岐点に達した。ここを境に冥花は別の道を歩んでいく。

まるで友達の家で遊んでいるときに、親が迎えに来た子供のような表情をする冥花。ピンツと空高く伸ばした手をぶんぶん振り回しながらバイバイ、と叫んでくる。その声量は明らかに近所迷惑レベルに達しており、俺はその場から早急に立ち去るという方法でそれを解決した。

そして冥花という名の通信手段を失った俺たちは言葉を交わさなかった。もともと俺と比島は会話をしておらず、言葉を交わしたのは挨拶ぐらいだった。二人の静けさは闇夜の静寂、という比喻でも足りないだろう。

そんな考えを巡らせていると、比島がこちらに振り向く。

「僕の家、こっちなんです」

「ああ、そうなのか」

比島が自分の家があるといった方向は、マンションが立ち並んでいた。俺はそれで比島はマンションに住んでいると仮定してみる。それなら俗に言う転勤族という奴か。だがそれでは金をかけて私立に入学する意味が無い。

まあ一身上の都合なのだから探りを入れるのは無粋だ。

「今日は付き合ってくれてありがとう。富原くんって見かけとは違つてとても優しいんですね」

俺はそれに微笑を返しながらも、心の中はまったく別のことを考えていた。

優しい……か。俺はみかけと同じで残酷な人間だ。ついそう漏らしてしまいそうになって、あわてて自分の口に力を込めて、閉じた。「じゃあ、さようなら」

顔に笑顔を浮かべながら立ち去っていく比島。そんな笑顔を見て、あの時の感覚が甦る。

俺は、比島幸祐という人物を見誤ってはいなかった。浮かべた笑みは、殺人鬼が被った仮面のような笑み。いや、例えではなく事実だ。こいつは、他人の死に触れた事がある。血の温もりをその指先で感じたことがある。俺の直感がそう語っていた。

こいつは俺の見当どおり、絶対的異質者だ。

俺はどうか平静を装いつつ、比島に手を振った。奴は俺から視線をはずし、歩みだす。俺はただ見つめた。そいつが俺の視界から消え去るまで。まるで死に魅入った自殺志願者のように。

比島が視界から消えると、俺は笑いを堪えられなかった。狂ったように、不気味な笑い声を轟かせる。

それはあいつにではなく、自分にだった。あいつを殺人鬼と称した自分に、殺人鬼は自分じゃないかと。

三人も殺したんだ。殺人鬼と呼ばれても十分だろう。

俺は止まらない哄笑を、手で口を押さえ込むという方法で止める。静かに口元を歪みしながら、帰り道、歩を進めていく。

奴は少し間違えている。この事件からの防衛手段に俺を選んだ事を。明日の学校は騒がしいだろう。話題は決まっている。四人目の被害者のことだ。

## 第一章「殺人依存」・三話：比島幸祐

自宅のドアを開けると当然のごとく人はいなかった。

ここは僕の部屋だ。二階建てのアパートで老朽化が進んでおり、冬には取り壊す事が決まっている。まあ付近には最新設備のマンションが立ち並んでいる事から、合理的な判断だろう。大家さんはお年寄りのおじいさんで、最初僕がここに引っ越すと聞いて不思議そうだった。

ここには僕以外誰も住んではいない　まあすぐ如月市に戻るのだから関係ないか。

だが関係ないと銘を打っておきながら、正直ご近所とのコミュニケーションが無いのは寂しい。

僕の部屋はこのアパートの201号室。別に201である事に意味は無いのだが、しいて言えば響きが好きといったところか。

一本道の廊下。その向こうに畳を敷いた居間がある。その他にはトイレ、風呂、キッチンも備わっており、一ヶ月程度住む家にしては高性能。テレビは無いが。

中心にポツンと置いてあるテーブルには携帯電話が置いてある。

これは今回のために予め購入しておいた物で、前回は通信手段を持つていかなかったことにより帰宅後悲惨な目にあつた。カメラ機能やらなんやら付いているらしいのだが、メールを見ると電話を掛ける事ぐらいしかできない。僕は基本的に文明の利器という物は苦手だ。

それを手に取り、中のメール受信数を確かめる。見る事が出来るのであって、メールを送る事はできない。そんな悲惨な現状を苦にしないのが僕と言う人間だ。胸を張って言える事ではないのだが、一件のメール。送り主はやはり夜だった。

『今日の学校の授業はたいした事をしなかった。この分だと幸祐が

戻ってくるまであまり進まない。何時戻ってくるんだ？ メールを返せ』

……夜らしいメールだ。あまり進まないと推測しておきながらその推測に必要な僕の出張期間を訊いて来るといふのはどうなのだろう。そして最後のメールを返せ……。

僕は夜にメールが送れない事は伝えたはずだ。夜も少し蔑んだような目で見るといふ返答を返したのだから、承知のはずだけど……。まあメールではなく電話だ。せめて返答はしないと血祭りにされる。

『はい。こちら黄神オウカミですが、どなた様でしょうか？』

『比島です。夜をお願いします』

『ああ、幸祐くんか。夜お嬢様だね。今呼んでくるから』

電話の相手は世話係の伏川さんだ。夜は名家のお嬢様。黄神は如月市の華族四家の内一つで、昔からあの土地でかなりの権力を持っていた。現在もその名残は強く、如月では警察でも頭が上がらないだが本人曰く、「周りが勝手にしてるだけだ。生きているのは今なんだから、過去の地位なんて関係ない」との事だ。

『何だ幸祐。急に電話なんか掛けてきて』

何の前置きもなく、電話口から聞こえる苛立った夜の声に面食らう。お電話変わりましたとか、色々言うべきだと思ふのだが……。そこら辺の常識は必要ないものだと思ふ認識されているのだろう。

「メールの返答だよ。そっちに帰るのは一カ月後になりそう」

『それはメールで返せといっただろ。それに一ヶ月？ なんてそんなに掛かるんだ。たかが殺人事件の捜査だろう』

どうやら僕がメールを返せないのは本当に忘れていたらしい。だが、たかが殺人事件って日夜解決に奮闘している警察官の方々にその台詞を聞かせてあげたいよ。

「殺人事件の調査には一ヶ月ぐらい妥当なの。前回もそれぐらい掛かったじゃないか。そんなに文句があるなら夜が来ればいい。夜の『真実の眼』なら一発だろ？」

『私の眼は現場を見なければ機能しない。悪いが血生臭い現場なんて死んでも御免だ。それに犯人が普通じゃなかったらどうする。猟奇殺人らしいし、そういう点から見て今回はお前の方が適任なんだよ』

その正論に僕は親に怒られた子供のように氣勢を失う。電話の向こうで夜がしてやった顔で笑っているのが想像できた。

その後はお互い他愛の無い会話を交わした。夜が苛立っていたのは、どうやら今日一日寂しかったらしく、それは会話をする中で薄れていった。だが最後に毎日電話しろとの要求が入り、それで会話は終了。恐らく一日でも忘れたら……想像したくないな。

ふと、窓から外の景色を眺めてみた。辺りは既に暗くなり、時計の針は八時を指していた。単純計算で夜との会話は一時間。電話代は黒崎さんが払うのは確実だ。これが三十日続くとすると、少し可哀想だ。

そんな窓から見える月はまるで異世界への入り口。そして、全てを吸い込む空洞のようで、自分のいる場所を失いそうな気がして恐ろしかった。



## 第一章「殺人依存」・四話：真夜中の訪問者

暗闇に包まれる丑三つ時。月の面妖な輝きが心の奥深くに眠る残酷性を手招きする。子供のように誘われる、それは惨劇の犯人。

夜の闇に溶け込む人影は、富原豊その人だ。広い肩幅に鋭い眼光。黒いＴシャツに青いジーンズ。結った長髪を揺らめかせながら、ただ佇む。

異常な風貌ではない。ただ、彼の体から漂う雰囲気は、異常だった。

そんな彼の右手には、妖しく光る一本のナイフ。血の味を覚えたそれは吸血鬼の牙のように血を吸う。ただ、赤化粧に幻想を抱きながら。

朝河岡の北と南を分かち恵品川。空を分断する天の川のように、流麗な光彩を放つそれを繋ぐ一本の橋の下、獲物はいた。

ぐっすりと眠りについた男性。薄汚い服装を身につけたその男は、俗に言うホームレス。彼もまた世間という薄汚れた常識に排除されたモノ。似たモノ。

ただそれを眺める彼。吸血鬼の牙は血を求め、今日も夜を走る。朱色の軌跡を残しながら……

「おじさん起きてください」

肩を揺らしそう囁く彼。その声に瞼を開く男性。丑三つ時という普段は目覚める事の無い時刻に起こされる。十分に休養をとれていない体は、実に緩慢だ。

殺されとも知らずに、実に滑稽。

「なんだあこんな夜中に。一体誰」

振り向く男の目に彼は一体どんな風に写ったのだろうか。がつしりとした男性？ 大人びた風貌の青年？ そんな生温いものじゃないだろう。恐らく

「夜分遅くにすみません。殺人鬼です」

悲鳴を上げることなく、笑う事もなく、怒ることもなく

男の生命活動は停止した。

首に刺さったナイフから伝わる頸動脈の流動。それが薄れていくのが何とも言えない恍惚。

彼は、死体になっていく男に同調するかのように体をビクンと震わせる。死を感じ生を実感するモノと、死に触れ生を実感するモノの共鳴は、どんな二重奏よりも美しい音色を奏でていく。

ゆっくりとナイフを引き抜いた。傷口から噴水のように血が噴き出て彼の顔を濡らす。人工物ではありえないこの鮮やかさ、温もり。

ああ これは本物だ。

そのままナイフを男の首本に突き立て、割くように動かしていく。噴き出る血は気にしない。それさえも快感であるが故に。

呆気なく 首と胴は分離した。

朱色に染まった鋼の刃は、なお血を求める。彼はナイフを走らせ見事な手際で左腕を切断した。

その頃には噴水の勢いも収まっており、朱色の鮮血は地面へ浸透していく。橋の下で長らく水を得なかった雑草は、それこそ吸血鬼のようにそれを吸っていった。

だが彼はそんな光景には目もくれず、迅速に右腕両足を慣れた手つきで切断する。その表情は遊び道具を与えられた子供のように、無垢で純真な笑顔。温もりを失う肉片とは対照的に彼の心のボルテージは急上昇していく。

さあ今日は何を作ろうか

ニヤリと顔を歪める彼の瞳は、ただ  
哀れだった。

## 第一章「殺人依存」・五話：事件考察・前編

まるで、昨夜の出来事を洗い流すかのように雨が降っている。梅雨の季節に入った今、こんな雨が続いていくのだと思う。灰色の壁紙でも張ったかのように空は雲に覆われており、夕方だというのにそんな気配は一切しない。

昨夜の出来事といっても僕はまったく知らない。人が一人死んだ、それが現時点での情報。登校二日目となる学校でも事件について憶測が飛び交っていたが、それは所詮憶測という範疇を逸脱しないもので、信憑性には欠けていた。

だが、まさか初日から事件が起こるとは思ひもしなかった。まるで自分の転入にあわせて起こったみたいで、そういうありがた迷惑な歓迎は嬉しくないというのが本音だ。調査をしに来たというのに早速これじゃあ、呆然とするしかない。

ふと、雨粒が靴を打つ。染み込んでくる液体は冷たく、僕の体を震え上がらせた。

早く家に帰りたい。そんな思いで歩を早めていく。家に帰って、濡れた靴を脱いで布団を頭からかぶってうずくまる。そうすれば少しは温かくなる。

必死に歩を進めて、気がついたときには、アパートを通り過ぎていた。

「邪魔してるぞ」

僕を出迎えたのはぶっきらぼうな男性の声だった。

勝手に侵入し、その上自分の部屋のように寝そべっている男性。

彼は黒崎暁さん。クロサキアカツキ僕が所属している探偵事務所の所長だ。

背丈はとても高く、横になっただけで部屋を占拠している。

髪型は俗に言うわかめヘアという奴が肩口まで伸びており、それが哀愁漂う大人の雰囲気をもし出していると言えはいるのだが、本人の性格は陽気そのものと言う正反対。服装はワイシャツに黒いズボンという、いかにも働いてますよ！と、いう感じなのだが、実際はだらけ癖がついており、ダメな大人という言葉がよく似合う。働き始めれば能力は一流企業のNO.1にも引けをとらないのだが……。

「どうやって侵入したんですか。僕は無用心じゃないので鍵はちゃんと掛けてましたよ」

「合鍵を作っておいたんだ。連絡があるときに玄関の前で待っているのも退屈だからな。お前どうせ携帯持ち歩いてないだろ。ダメだぞ、せっかく買ったのにそれじゃあ宝の持ち腐れだ。そうだな……夜へのラブコールぐらいしてみたらどうだ？」

「何を勘違いしているのか知りませんが、僕と夜はそんな如何わしい関係じゃありませんから。それに携帯の使いすぎで通話料を事務所費に響かせて、部下に怒られた人に言われても納得できません」

黒崎さんは苦虫を噛んだような顔をしながら、それは仕事関係の電話なのになあ、と、呟く。無論それは知っているが、反論はしておきたかった。ちなみに言うておくが叱ったのは僕ではない。

「それで今日は一体何の用事で来たんですか。用が無いなら帰って欲しいんですけど」

「そう言うなって。家賃払っているのは俺なんだから。今日は知り合いの警察関係者から三件目までの書類をもらったから渡そうと思ってきたんだ。四件目は我慢しろよ、昨夜発生したばかりでまだ調査中だから」

最後に読み終わったら返せよ、と付け足して束ねられた書類を手渡してくる。そこには現場写真、被害者の情報、およそ考えうる事件の情報全てが記載されていた。何故この人がこんなものを持っているかについては、目を瞑っておこう。

ひとまず一件目の書類に目を通してみるか。

“一件目の被害者は小野啓吾（19）無職。路上で犯人と一時格闘となり、犯人に押し倒された所で刃渡りおよそ二十センチのナイフで首を刺され死亡”

そこまで読むであることに気づく。一件目の被害者は犯人と一時格闘になったと記してある。なら犯人は証拠を残しているのではないのだろうか。例えば、爪で引っかかれたりしていれば皮膚が爪に付着している可能性もあるし、犯人の髪が路上に落ちている可能性だってある。

だが証拠については一切記されてはいない。これじゃあ

「証拠が無いんだ。犯人の存在を証明する証拠がな」

まるで僕の心を読み取ったかのように話してくる黒崎さん。以前この人は読心術を学んだ事があると言っていたが、その類だろうか。だが犯人の存在を証明できないという事はどういう事なのだろうか。

「それじゃあ他殺であると断言できないじゃないですか」

「お前はあほか。死体が自殺したあと生き返って自分の四肢を切断するか？ そんな超常現象……起こる確立もあるが、それが残り二人の被害者も共通なんだ。三人、もしくは四人もの人間が同時期に力に目覚める事は確率的には低すぎる。だから今回は他殺の確率が高いんだよ。それに警察関係の凡人どもに、“欲望覚醒者”のこと

を説いてやつても信じないだろ」

納得せざる得ない。確かに力の目覚めは個々で違う。

『欲望』は覚醒するだけでも確率は低い。それが同時期に数人の身に同じ力が目覚めるなんて、それこそ超常現象だ。その数人が同じ欲望を望んでいたという確率も、これまた低い……。

だったら

「犯人が覚醒者という確率は無いんですか？」

黒崎さんは手の平を片手の拳でなるほど、と言わんばかりに叩く。

「確かにそのほうが確率は高いな。ならやっぱりお前を呼んどいて良かった。戦闘になる確立があるんじゃない、下手に夜に調査させられないもんな」

「でも、もし強力な能力だったらどうするんですか。僕は『白純のシラズミノホノオ焰』と『針止めの眼』ハドメノマナコしかありませんから能力的には貧弱ですよ」

「全てを焼き尽くす白炎に、時を止める眼なんてフルコース。そうそう覚醒するもんじゃ無いぞ。少しは誇ったらどうだ」

「じゃあ、せめて武器ぐらい渡してください。僕は武器らしい武器持ってきてないんですけど」

「武器持ってきてないのか。……仕方ない」

これを持つとけ、と黒崎さんが渡してきたのは皮の鞘に納まった刃渡り十五センチほどの、ファイティングナイフ。重量はそこそこあり、力いっぱい振れば腕の一本ぐらい一気に切り落とせそうだ。

だが、いきなり物騒な話になってきた。正直、犯人を捕まえて警察に引き渡す程度の依頼だと思っていたのに、これじゃあ夜の予想通りだ。

「でも本当に戦闘になったらどうするんですか？」

「依頼は事件を止める事だ。事件を止められるならお前の好きにやっていいよ」

それを聞いて少しほつとする。あまり相手を殺すのは好かない。

殺人はいけない事　が僕のポリシーだ。

それは突き通すべき事だと思う。たとえ自分の両手が血に染まる  
うと、それが人間としての尊厳だ。

その後、話したい事を全て話し終えたのか、黒崎さんは僕の手から書類を奪い取り足早に部屋から立ち去っていった。まるで風のよ  
うな人だ。それに書類もまだ一件目までしか読んでないのだが……。  
仕方なくその日はすぐに寝た。もちろん夜への電話はしたのだが、  
本人がもう眠りについていたと言う事なので、世話係の伏川さんに  
電話をした事を伝えておいてください、とだけ言って、電話を切っ  
た。

さつさと敷布団を敷き、寝転がる。今日の月は漆黒の暗雲に覆わ  
れて見えなかった。

この空模様では明日も雨だろう　。



## 第一章「殺人依存」・六話：好奇心

四件目の事件が発生してから、二週間が経った。暦は2005年6月20日。梅雨の時期も終わりに近づいた今日の天気は、気分を陰鬱にさせる雨。……こんな日はだらけるに限る。

……ふと、考えてみる。最初に人を殺したのは4月の末だった。合っていれば、既に事件発生から2カ月が経っている。それでも事件に進展は無い。別に警察が無能なわけではない。単に俺が、捕まりたくないから、捕まらない最善の方法を取っただけだ。彼らの捜査の基本は証拠だ。例えば、いくら目の前に、オレ人殺しでえゝす、なんて奴がいても、手を出す事は無理だ。血の付着したナイフでも振り回していれば話は別だが、生憎そんなバカはそういない。つまりだ。証拠さえなければ捕まらない、と考えないだろうか。

だから俺は証拠を消した。皮肉なことに、殺人という行為に愛着を持ち始めた俺は、それに最も適していると思われる能力を手にしたのだ。運命というやつが神様の手に委ねられているのなら、もう少し下界の治安維持に気を配っていただきたい。

それはさておきだ。今、俺は自分の席に座り、比島を観察している。こいつは相変わらず。二度感じた違和感がまるで嘘だったかのように、普通の人間。いつも丁寧語、笑顔を崩さない。その姿はよく出来たロボットのようで、たまに気味が悪くなる。品行方正と聞けば良い子ちゃんしか思いつか無いだろうが、実際あってみると吐き気がするほど現実味が無いものだ。

そんなことを考えながらふと、教室の窓から外をのぞいてみた。雨は一向にやむ気配を見せない。

あの日から雨は嫌いだ。全てを奪っていきそうな気がする。確か、あの日も雨だった。路面に広がる朱色を洗い流したあの雨。存在する意味よりも、生きる意味を失ったあの日。雨って言うのは結構純粹な洗浄剤かもしれない。だって具体的なものから、人の心

とかそんな抽象的なものまで洗い流していくのだ。  
そう、消し去ってしまいたい、煩悶の過去さえも……

放課後の時間帯。夕暮れ時だというのに、空の色彩は灰色のまま  
だ。それと同じで陰鬱な気分もそのまま。何もかもが平行線をたど  
っている。変革の無い日々を送っていると、なんとなく退屈だ。

だから、そろそろかと思っている。あれから二週間。高ぶる気持  
ちを押さえつけ、家に置いてあるナイフを眺めるだけだったのだ。  
あの脳を溶かすような感情の嵐。神経を焦がすような絶対的な命令  
もう我慢は出来ない。誰かに干渉しないと自分が保てない。自  
分を実感できない。

そうと決まれば即実行だ。今日は特に学校に留まる理由もなく、  
帰ろうとする俺の歩みを、聞き慣れた声が制止した。

「ねえ、ゆうくん。少し話があるんだけど」

振り返ってみると、冥花は少し申し訳なさそうな顔でこちらを向  
いていた。

「どうしたんだ？」

「あのね。串永くんから用事があるから旧校舎まで来てくださいつ  
て頼まれてるの。だから今日は一緒に帰れそうに無いんだ」

旧校舎というのは数年前に使われなくなった校舎で、取り壊せば  
よいのだが、別段そういう計画は無いらしい。まあ物置としての役  
割を担っているの、そんなことする必要は無いというのもあるの  
だが、一番の理由は我が校の伝統を！ とかいう謳い文句に利用す  
るためだろう。そんな理由でこの無駄に学費の高い高校に丹生がす

る野郎なんかない。いたら相当の物好きだろう。

だが串永が冥花を呼び出すとは意外だ。恐らく告白でもするのだろうか。「そんなのはまだ早いと思います」で片付けられる。どちらにしろあいつの告白をOKする女の気が知れない……。とまでいうとあいつが可愛そうだ。正直、プライドの高いやつのことだ。俺に順位で勝利してからだと思ったのだが、見間違いか。

順位と言うのは二週間前にしたテストの結果だ。冥花は前回同様五十位以内をキープ。串永と俺の 串永に言わせれば頂上決戦。軍配は俺に上がった。順位は総勢281人の内、俺に196位。串永227位。考えるたびに低レベルだと自負する。

そんな低級戦争のさらに下を行ったのが比島。ぶっちぎりの最下位だと聞いている。

この学校の授業進行スピードはかなりのものだ。例えるなら普通の公立高校のスピードを常用車とすると、戦闘機ぐらい速いだろう。二年までに応用も含め、高校の課程を修了させる。その後、大学受験に向けた勉強をさせていく……。他の学校では信じられないような内容をやっていると感ずることもある。転校生である比島の分が悪いのは当然だ。

「そんなに考え込んでどうしたの？ ゆーくん」

返答の無い事を不思議に思った冥花の声で、俺は現実へ引き戻される。考え込むと、周りの事に無頓着になつてしまふのが俺の悪い癖だ。

「ああ、なんでもない。いいぜ、行ってこいよ。串永、待ってるだろうからな」

俺の言葉に首を縦に振り、その場から走り去っていく冥花。こんな空模様でも、あいつの笑顔は相変わらずだった。どうやらあいつ

の心は赤道直下で白夜状態。いや、赤道直下じゃ熱すぎるからフランスぐらいにしておこう。まったく、水分供給はどこからしているのだろうか。

不意に、頭をよぎった考え。      あいつは俺が殺人鬼だと知ったらどうするのだろうか？

侮蔑するのだろうか、それとも罵るのだろうか。そんなことに興味を持ってしまった自分を呪った。そんなこと分かってても意味はない。ただこの殺人衝動に拍車を掛けるだけなのだから。

視界から冥花がいなくなったことを確認し、振り向こうとした足を、止める。

「串永の告白かぁ。見に行ってみようかな」

奴が冥花にふられて、どうするのか。喚くのだろうか、はたまた大人らしく納得し、その場から立ち去るのだろうか。高校生にもなつて、そんな中坊が喜ぶような話題に食いついてしまった。俺も女々しくなったものだ。まあ瑣末なことだが、こういうアホらしい出来事も人として潤いを保つには大事なことだ。俺は、心に生まれた微かな好奇心に従う事にした。

好奇心なんて、まったくもって危険なものだと分かっていたのに

……

## 第一章「殺人依存」・七話：殺人という行為

ここは旧校舎の一階と二階を繋ぐ階段の、中間。一階と二階という別世界を分かち場所。ただでさえ日当たりが悪いのだが、あいにく今日の天気は雨。小降りにはなっているものの、空の灰色は一向に晴れず、深淵の闇は空間を包み込む。淀んだ空気も充満し、そこは老朽化した旧校舎よりも異質な空間に成り果てていた。

そんな淘汰した場所を訪れる、二人の人影。滅びた空間を照らす太陽のような少女。そして滅びた空間とよく似た不完全な少年。あまりにも不釣り合いなそれらは、どこか、結末を予感させた。

「それで話つてなあに？ 串永くん」

階段の中間の突き当たりで振り向く彼女。流麗な黒髪を乱雑になびかせながら、その無垢な瞳を彼へ向ける。うつむき加減の彼は静かに彼女の瞳を見つめていた。青い病的な、屍のような顔で。微かに、薄気味悪い笑みを浮かべながら。

「話っているのはね。そのねえ……」

そう言いながら彼女へ近づいていく彼。

刹那。彼の両腕が躍動を得る。虚ろだった瞳に灯された、雌を見る雄の本能。彼は不意に、彼女を壁際に押し倒し、その事に愕然とした彼女に馬乗りになった。

「何、串永くん！ やめてっ！ やめてよ！」

突然の出来事に動揺しながらも、反抗するため声を張り上げる彼女。

「うるさい！ 黙れ黙れ黙れ！ 勉強、運動。富原に全て負けたんだ！ こんな僕のプライドが許さない……！ だから！ あいつが大切にしている君を、僕が汚すんだ！ 僕のモノにするんだ！」

汚濁にまみれた薄汚い言葉。自我の塊となった彼は止まらない。力いっぱい彼女の制服の襟を掴み、斜め一文字に破り捨てる。露になった汚れを知らない純白の肌。

これ以上は……！

彼女の抵抗はより一層激しくなる。突き出される手や足が、彼の顔を押しつけるように動き、これ以上の侵攻を阻もうとする。彼は自らを拒む手のひらを払いのけながら小さく舌打ちをした。

すると、自らのズボンのポケットに手をつ込み、怪しく光るナイフを取り出し、それを彼女の眼前へ近づける。それを見た彼女の顔は必死に抵抗する熱を帯びた表情から、蒼白なおののいた顔に変わる。その様はまるで吹き消される蠟燭の灯火。彼女は抵抗する事をやめた。彼はそれを確認してから、ニヤリと口元を歪ました。

彼の 欲に取り憑かれた獣の醜い唇は、少しずつ、宝石のように汚れを知らない唇へ近づいていく。

「おい！」

階段下から響く怒号。獣は自らの行為が中断された事に不快そうな顔をするも、刃先を彼女に向けたままそこを覗き込む。

怒りに燃えた、静かな瞳。冷静で冷たい、紅の劫火。漆黒の闇と同化するほど黒い髪を揺らめかせ、そう形容するに値するほど憤怒した、富原豊がそこにいた。

「富原……お前なんで来たんだあ？」

「お前のフラれる所が見たくてよ。でも、告白どころか犯罪現場を目撃するとは思ってなかったぜ。……お前。俺が来たからにはどうなるか分かってるよな」

それを聞いた獣は、狂喜した。吐き気のするような笑い声を轟かせながら立ち上がり、階段上から彼を見下ろす様に佇む。未だに、ナイフは彼女に向いたままだ。その点については、用心深いと言えよう。

「富原あ！ 確かにお前は強いよ。『少年空手全国大会ベスト8』、『中体連主催全国柔道大会ベスト4』。ひ弱な僕はどう足掻いたって勝てやしないさ！ でもなあ、僕にはこれがあるんだよ」

そう言つて、獣はナイフを自分の口元に近づける。銀の光を放つそれが、あたかも自らの牙のように。彼はそれを凝視し、まぶたを閉じる。そして、つかの間の沈黙の後、獣に聞こえるように呟いた。

「それが？」

と。恐怖のない、半ば呆れた口調で。先ほどの怒りに満ちた表情は消え、微かに笑みさえ見える。

「へっ、強がるなよ。ここで殺してやる。これが僕の復讐だ！」

彼は獣の熱弁を聞き終えると、深くため息をついた。目の前にいる哀れな獣に、僅かな殺意を抱きながら。

狂った叫び声を上げ、獣は跳んだ。真っ直ぐ彼めがけて。その刃を彼に突き立てるために。彼も動かない。ただその刃を、睨みつけるだけで、モーションは無い。

そしてその刃は 彼を捉えなかった。

「ドン！」

轟音と共に床に体を打ち付ける獣。階段の最上段から飛び降りた衝撃はひ弱な体には強すぎて、苦しそうなうめき声を上げ身をよじる。それは死に掛けのゴキブリじみっていて、吐き気がするほどおぞましい。

床に落ちたナイフ。それは彼の首もとを通過した。ただ 刺しはしなかった。

「……なんで？ 刺したぞ。刺したはずなのに何でお前は死なないんだあ！」

「刺されては無い。俺の体を通り過ぎただけだ。その刃が 俺の存在を認識できなかっただけだ。どんなに研ぎ澄まされた刃でも、どんなに速い銃弾でも、俺を死には至らしめれない。俺は ソシザイリユウシヨジン 『非存在理由所持者』だからな」

彼は長い説明を終えると、静かに歩き出す。落ちたナイフの下へ、ゆっくりと落ち着き払った表情で。

いつも使っている物とは違うが、大丈夫だろう。

獣はその一連の行動を怯えながら見つめていた。逃げる隙はいくらでもあったのだ。でも逃げれない。蜘蛛の糸に絡めとられた蝶のように……いや、蛾のように。ただ、凶刃が迫るのを見続ける、他無かった。

内心。化け物に勝負を挑んだ事を後悔しながら。

その遅すぎる後悔をゆっくりと味わいながら、獣は狩られた。



「ごめん。あつ、少しどいて」

野次馬の群れを掻き分けながらどうにか前に進む。なぜなら何事も無く家に帰ろうとしていた僕の耳に“殺人”という単語が飛び込んできたからだ。

長い長い人ごみを抜けた所に　それはあつた。

朱色の池を床に作りながら、存在する死体。首元を貫いたナイフ。そしてそれを力強くつかんだ男の手。それは日常からかなりかけ離れたものでありながらも、この旧校舎に酷く似つかわしくて、なんとも、『をかし』と言いたくなってしまう。

「同じクラスの、串永幸一郎……」

同じクラスの人間が死ぬという現象を、生まれてから死ぬまでに体験できるだろうか、と思っていたが意外に早かった。

別に、殺人現場なんて珍しくは無い。この前黒崎さんに見せられた書類の写真には、こんなものとは比べ物にならない惨劇が広がっていたからだ。

だけど、この現場は気味が悪かった。蛇が背中を伝い、静かに首元を舐めるような寒気。この場の空気とよく似た、薄汚い怨念が漂っている、そんな気がした。

ひとまず、走って荒くなった息を整えるため深呼吸をする。汚れた空気を味わうようにゆっくりと。別にそんなつもりは無いが。それでもう一度現場に目を向けた。現状は変わらず、死体が転がっている。

「はあ。まいったなあ……」

自分でも意味が分からないその言葉を、  
頭を掻きながら静かに呟  
いていた。

## 第一章「殺人依存」・八話：事件考察・後編

未だに南の空で輝き続ける太陽を見て少しげんなりとする。僅かな望みを託して壁に掛かった時計を確かめるが、時刻は二時三十分。まだ昼だ。

「暇すぎて死にそうだ……」

そう一人寂しく呟いてから、テーブルの傍らにおいてあるペットボトルのお茶を手を取った。キャップをはずし、少しだけ口にする。今日の学校は休みだ。そりゃ、校内で殺人があれば学校が休みになるのも頷ける……。正直、人が死ぬだとかは聞き慣れているので、別におかしい所は何もないと感じてしまうのだ。こういうことを思うたびに、自分が異常だと実感する。

三年前から変わってないなあ、と。

そんな思いにふけていると、玄関の方から足音が聞こえてくる。

鍵は掛けておいた。ならあの人しかない……。

「邪魔するぞ。どうした？ そんな腑抜けた顔して。これから殺人鬼の話をしようって言うのに大丈夫なのか」

心配そうな表情で入室してくるわかめ頭の男性に、余計なお世話ですよと言葉を返す。

三年前。僕は彼に始めて出会った。死者の遺灰が、そよ風に乘って飛び立っていった場所で。

その話はまた今度だ。

僕は気だるい体を動かしながら、正座ではないが幾分かましな座り方に姿勢を直した。

「今日はどんな情報を携えて来られたんですか。黒崎さん」

そう、単刀直入に尋ねると、黒崎さんは少し眉をひそめながら、  
「気が早いなあ、と口にした。」

「少しぐらい雑談してからでもいいだろうに。まあいいや。今日は  
な、猟奇殺人の五件目とお前の学校で起きた事件の関連性だ」

「五件目？」

聞いたことの無い情報に僕は首を捻る。新聞などは見逃さないよ  
うに心掛けているのだが……。

先日起きた串永幸太郎殺害事件。旧校舎の一階の階段付近で串永  
幸太郎が、何者かに刃物で首を刺され死亡したという事件だ。僕も  
野次馬がたかつていた現場を見たから知っている。

だが猟奇殺人事件の五件目なんてものは知らない。ニュースでも  
報道されていなかった。

僕はまず、その事について尋ねる事にした。

「猟奇殺人事件の五件目があったんですか？ テレビでは報道され  
ていないようでしたけど」

「ああ。警察は市民の不安を煽らないように公表してないが、五  
件目はあったよ。昨日の夜中一時ごろだな」

そこで話を切ると、黒崎さんは持ってきていたビニール袋の中か  
ら缶コーヒーを取り出す。続いてタバコも取り出し、狭い室内だと  
いうのに火をつけ吸い出した。副流煙の方が人体に悪影響を及ぼす  
ということを知らないのだろうか。黒崎暁という人にとって、コー  
ヒー、タバコは必須だ。僕の出勤して最初の仕事と最後の仕事がコ  
ーヒーを淹れる事なのも、この人だから領ける。

「でも関連性ってどういうことですか？ あの事件は猟奇殺人事件とは別件で扱われたんでしょう？」

「昨日電話でそう話したな。じゃあ反対に質問するぞ。なんで関連性が無いんだ？」

僕はその言葉を聞いて、この人が僕に何をさせたいのかよく分かった。正直胸クソが悪い。だけど、僕にはそれ以外の選択肢が残されていない。腹が立つが従おう。

「だって……。今までは深夜の道端でほとんどの犯行が行われてきました。でも今回は学校内。しかも夕方。これじゃあ犯人の行動に矛盾が生じます。証拠を一つも残さなかった犯人が、場所での証拠を残したんですから。道端なら犯人は特定し辛いです。出来ても周辺の住民、程度しかありませんからね。でも校内で殺人を犯した場合、その学校の生徒である確立が高まっています。そんな場所で犯行をする事はリスクが高すぎる。第一、死体が解体されてませんから。これらを踏まえて、何らかの事故かそれとも便乗犯か……。

全部昨日の電話で黒崎さんが話したことの受け売りですけどね」

黒崎さんは話を聞き終えると、「正解」、と首を縦に振りながら言ってくれた。だが口元が少し笑っている。全てはこのため。自論を僕に語らせたかったのだ。

心底頭にきて、怒気を孕んだ目線で黒崎さんを睨みつける。それに気づいた黒崎さんは、申し訳なさそうな顔で、僕をなだめる様に右手を前に出して上下に動かす。表情には出さなかったが、その行動も不快感を増幅させた。

「悪い、悪い。そんなに怒るなって。まあ、その昨日俺が唱えた説も合っていたんだが……証拠が見つかったな。お前のところの学生証」

「学生証が見つかったんですか？」

驚きで柄にもなく声を張り上げてしまった。黒崎さんはそんな僕の目を肯定の眼差しで見つめてくる。その表情は先ほどまでの緩んだ表情ではなく、真剣そのもの。　　どうやら本当らしい。今まで指紋さえ、足跡さえ残さなかった犯人が学生証を落としていった……。かなり現実味に欠ける話だが真実なら仕方が無い。

でもこれで話が繋がった。猟奇殺人事件の犯人は朝河岡の生徒で、串永幸太郎も殺したんだ。落としてあった学生証がそれを物語っている。

そして、新たな疑問が芽生えた。

「でもそれなら、何故串永幸太郎は解体しなかったんでしょうか？　第一発見者が遺体を発見するまで、およそ四十分。四件もの事件を起こしているからに、かなり手馴れているでしょうし、返り血を浴びるリスクがありますが、犯人としては解体する方が重要なんじゃないでしょうか？」

「それはな、これが殺人だからだよ。今までの事件も全て殺人事件と銘打っているが、あれらは殺戮の類だ。殺人なんて高尚なものには含まれないよ」

そこで黒崎さんは言葉を切った。タバコの煙を吸い、昨日や一日までの空模様とよく似た煙を室内に吐いた。

「　　いいか。殺戮って言うのは無意味な殺人だ。人類は古来、無意味な人殺しを殺戮と罵った。殺戮って言うのは下卑たるものなんだ。でもな、殺人には意味がある。嫉妬、絶望、憎悪。負の衝動に歯止めが効かなくなったとき、殺人は起こるんだ。高尚な人殺し……それが殺人だよ。だから結論でいうとな、串永幸太郎殺害には理由があつたんだ。万人に理解できる、正当な」

どこかで地雷を踏んでしまったらしい。黒崎さんの長い説明を聞きながら思った。黒崎さんはたまにこうやって長く論説をしてくれるのだが、僕はそこまで哲学好きではなく、チンプンカンプンな事が多くあまり好きではない。だから出来るだけ論説モードのスイッチだけは踏みたくは無いのだが……踏んでしまった。

でも先ほどの説にはあまり賛成できない。人を殺すのに正当性なんか無い。最後には自分勝手なんだ。結局、殺人は周りが見えなくなつて負けてしまった人の行為。

最後に、理性を保つのは他人への依存なのだから。黒崎さんの話の続きを無視して、そんなことを考えながら、ふと気がつくと黒崎さんが疑わしいような目で僕を凝視していた。

「幸祐。お前俺の話し聞いてたのか？」

「あ、はい。聞いてます。えっと……何でしたっけ？」

とたん、黒崎さんはあからさまに顔をしかめる。行き過ぎなきもしたが、あまりにも不快そうだったので少し悪かったな、と反省した。だが反面。珍しく考え込んだ事に自分を褒めたくなった。

だけど今は黒崎さんのご機嫌を伺うため、どうにか話を継続させなければならぬ。

「ええと……朝河岡の生徒なら学校側に捜査協力を申し出ればいいじゃないですか。生徒にも聞き込みをすればいいと思いますし」

「それがな……あいつら捜査協力を断ってきたんだよ。いや、打ち切ったの方が正しいか。一件目から情報提供してもらつてたんだが、生徒が犯人かもしれないと分かったとたん、手のひらを返したように態度を変えやがった」

黒崎さんの、虫唾が走つたといわんばかりの説明を、僕はペット

ボトルのお茶を口に含みながら聞いていた。水分の喉を通過する透き通った感触に安心を覚えながらも、頭を働かせる。

まあ学校側の対応はあながち間違いじゃない。生徒内から殺人犯が出るなんて、そんな事があつたら朝河岡の株は大暴落。入学率も落ち、世間からの視線も冷たくなるだろう。別に学校側に捜査協力の義務は無いのだから、そういう選択をするのは当然だ。強制捜査も難しいだろう。風の便りで聞いたのだが、朝河岡高校の上層部は警察内部にもパイプをもっており、そんな事許してくれないだろう。

組織内でのしがらみは僕も黒崎さんも嫌いだ。こういう事があるから、黒崎さんの口癖が「フリーは楽で良い」なんて物になったのだ。

「だからな、警察の捜査は八方塞。もうお前がどうにかするしかないんだ。あちらさんとしては犯人を引き渡してもらいたいだろうが、別に強制しない。だからな 事件を止める」

最後の言葉は威厳に満ちていた。静かに煙を吐く黒崎さん。この人の意外にしっかりしているところは、好きでもあり嫌いでもある。

そんなことを内心思いながら、少し窓からの景色に見とれてみた。水色の空は、白い不恰好な饅頭を浮かべながらも広がっている。広大で壮観で、たった二階からの景色がそんな風に思えた。そんなことだから、つい本音が出たのだろう。

「うらやましいな……」

そんな聞こえるか聞こえないかの呟き。黒崎さんは疑心に満ちた、少しこの人らしくない瞳で僕を見つめていたが、気づかなかった。



全ての原点は三年前。如月市で起きた殺人事件からはじま  
ったんだ。

……また嫌な過去を思い出してしまった。いい加減忘れ去りたい  
ものだが、そうはいかないらしい。今日の六曜は仏滅だったろうか。  
カレンダーを見てみると、違った。友引だ。なんとというか、昔から  
六曜にすぐ頼る癖がついてしまいそれがなかなか抜けないのだ。

「ま、幸祐。今まで殺戮だった行為が、殺人に変わった。意味  
の無いものには罪悪感ってモノは浮かばないもんだが、意味のある  
行為には結構罪悪感、感じるもんだ。相手がまだ普通なら、それで  
苦しんでると思うから、チャンスじゃないのか？　そういう相手には  
隙ができるもんだ」

人が苦しんでてチャンス……その考えに、僕はあまり賛同できな  
かった。

## 第一章「殺人依存」・九話：防衛

「はぁ……はぁ」

息遣いが荒いのが分かる。生きてきて、ここまで苦しんだことはなかっただろう。

深夜の闇の中。自室のベッドの上、死に掛けの芋虫みたいにのた打ち回る俺の姿はひどく惨めだ。想像してみても自分でも思う。

なんでこんなにも苦しいのだろうか。今までと同じように人を殺した。ただ理由があった。それだけなのになぜか苦しい。罪それが頭から離れない。胸の奥を突き刺されるような感覚と共に、あの言葉がよみがえる……

私は、何も言わないからね

殺せた。あいつが 冥花が警察にでも俺の情報を提供するなら殺せた。覚悟もあった。ただあいつは言わないと言った。俺の決意を燦らせた。

それが苦しい。あそこであいつも殺せていたならば、俺は罪悪感に苛まれる事は無かった。それを超える快感でこの心を満たせていたんだ。でも 殺せなかった。

何もいわないから

思い出すたびに吐き気がする。奇妙な感覚が神経を伝い、脳にまで広がる。全身を、突き刺すような、噛み付くような、そんな痛みが駆け巡る。その言葉は、自分が今まで握りつぶしてきた、誰かに知られてはいけない罪、ということを確認させた。俺が罪人だって強烈に、脳内に刻み付けたんだ。

俺はもともと、ここまでイカれた輩じゃなかったのに、どうして

ここまで歪んだんだろうか。どうしても原因が知りたくて、この十七年間の記憶からそれを探し出そうと試みる。が、そんなもの俺にとっては幾らでもある。正直、どれなんだが見当もつかない。

ただ、その中から最も最近だと思われる、答えを見つけた。

「ああ……そうか、そうだったな」

一人呟き納得する。あれなら十分、俺が壊れた理由にも等しいだろう。だってそれは　俺にとって初めての殺人。

　　肅然とした真夜中の闇。春告げる虫の羽音も、浮き彫りになるほど、あまりにも不気味で、酷く美しい満月に照らされた、世界だった……。

あの日。俺は珍しく深夜の散歩に出かけた。学校でのテスト結果が悪く、その気分転換、と言った感じだった。特に、危険への身構えはしていなかった。

　　そんな俺の背後から男が襲いかつてきたのだ。

男の事は知っていた。最近でかい顔を始めていた不良グループの一員。俺とそいつの関係と言えば、そいつが道端でうちの高校の生徒をかつあげしていて、俺がそれを邪魔した、その程度だっただろう。

だがその程度の因縁で、奴は俺に勝つため刃渡り二十センチものナイフを用意していたんだ。それを俺に突きつけてせせら笑う。

俺はこの男を疑った。本気かと。刃渡りが二十センチのナイフなんて刺されば確実に死んでしまう、そう思えたから。

男はナイフを突き出しながら、恍惚とした表情で駆けてきた。俺の体は凍ったように動かない。ナイフへの恐怖だったのか死への恐

怖だったのかは、今から考えると定かじゃなかったが、これがよく映画などで見る、恐怖に対する肉体の硬直なんだな、と感じた。死ぬ瞬間のスローモーションというやつも体験できた。ナイフの輝きが網膜に焼き付けられるほど、長い、酷く現実味の無いものだったのは今でも覚えている。

別に、俺にとって死なんて怖くなかった。生きる意味をなくして、世界を呪って、自分がここに理由さえも見出せていなかった俺にとつて、生も死も曖昧な、同様のものに捕らえれたから。

そんな俺に訴えかけてきたのは、俗に言う走馬灯というやつ。ただ、あまり意味の無い回想だったそれは、俺にとって、決意を変える要因となったのだ。

蘇った記憶は死に掛けの男。道路に横たわり、激しく吐血している。自慢の若白髪が真っ赤に染まるほど、出血の量は酷い。

俺を助けるために男はこの結末を選んだ。それでも、目の前の男は必死にうごめいて、死を回避しようとした。

そこで知ったんだ。どんな決意の前にも、死は、圧倒的で、哀れで、恐ろしくて　辛いモノだった！

気づいた時には、ナイフもろとも男の体は俺を通過していた。自分の体の中を物体が通り過ぎていく……。面妖な月の下。ひどく現実味の無い映像だったのは、今でも覚えている。

ただそのときの俺にはそんな事考えている余裕は無かった。勢いよく倒れこんだ男に馬乗りになって、その手からナイフを奪い取って、首に突き立てた……。

今から思うと殺す必要は無かったんだと思う。馬乗りになって、少し痛めつけてやれば良かった。

でも従ったんだ。俺の中の、殺人衝動に。解体したのは趣味でもなんでもなかった。ただ平凡な殺人事件じ

や昨今、あまり人々は驚かない。愕然として、恐怖して、ただテレビ画面に釘付けになる人々が見てみたかったのだ。

でも一番欲しかったのは話題性でも快樂でもなく　存在理由。誰かに干渉して初めて自らの存在を認識できる。死という絶対的な事象に介入する事によって、自分を必要とした。この世界に必要とした。存在の死に接触した人物として、世界の記録に存在を残したんだ。

そんな事を欲していた俺にとっては、過剰でも正当でも防衛なんてあまりにも都合が良くて、そこから殺人にほれ込んだ。

もう、俺はイカれてる。俺の殺意は止まらない。だって俺は、

「　殺人に依存する異常者なんだから」

つい呟いてしまった。これは何なのだろう。

そのとき俺は気づけなかった。誰にともなく発した言葉が、俺のメーデーだった、って。

今日も人を殺してしまおう。あの日から三日しか経ってないけど、もうダメだ。　壊れてしまいそうで、怖い。時刻は……十二時。日が変わったんだな……。

そんなくだらない事を考えながら、部屋を出て行く。ただ、闇に堕ちていく蝶のような、無残な姿で……

## 第一章「殺人依存」・十話：邂逅

深夜十二時を指す時計の針。それを一瞥して、一回深くため息をついた。

今日は6月23日。と言っても日が変わり、正式には6月24日で僕がこの町に来てから三週間近くが経とうとしていた。

……ここまで手こずるとは思いもしなかった。

学校から帰って、黒崎さんから拝借した書類を丹念に読み直したが、犯人の目星なんてものはまったくつかない。学校での聞き込みもしたが、まともに聞き入ってくれる人は誰もいなかった。

少し冷たいな……。そう感じた。

「今夜は徹夜かぁ。　コーヒーでも買ってくるかな」

決断すれば実行だ。ハンガーに掛けてある深緑のジャンパーをはおって、玄関から外に出る。ジャンパーは防寒対策だ。夏も近づくこんな時期に何故？　と質問されると僕が特殊だからとしか答えようが無い。

熱と言うものをあまり感じないなんて、誰が信じるのだろうか。

深夜の外灯と月光だけが照らすアスファルトの道を、悠然と歩いていく。夏の外気が肌に纏わりついて来て、肌着が汗で濡れる。暑くは無いがさすがに気持ちが悪い。

いくつかの角を曲がり、自動販売機でコーヒーを購入する。そして帰り、少し細めの路地に進入したときだった。

ポツン

生暖かい何かが、頬に落ちる。雨なんて降っていただろうか。そう思い、指でそつとなぞって見ると、赤い赤い雨が、指先に付着した。

それを見た瞬間から硬直した体。そんな状態でもどうにか視線を前に移す。

首の部分から血を噴出す噴水のような物体に馬乗りになっている男は、こちらの存在に気づいたようでゆっくりと振り向く。それは見知った顔だった。

「富原……くん？」

愕然とした表情でこちらを凝視する人物は、間違いなく彼だった。その大柄な体つきも特徴的な結った黒髪も、僕の頭の中にある彼と言う名の人物像に当てはまる。

彼は血のおいが充満したこの空間に座っていた。傍らに肉片と化した死体を添わせながら。妙にそんな光景が普通に見えてしまう。

「ひ……しま？ 何で……こんな所に……」

向こうも僕が誰か気づいたらしく、そう問いかけてくる。こんな状況でコーヒーを買いになんて、言えないな。そう思い、適等に流すことにした。

「別に理由なんて無いよ。君こそ、そんな場所で血まみれになっているのは何故かな」

「！」

そんな僕の詰問に対して、彼は小さく齒軋りする音で答えた。

苦しく、寂しげな音だった。

「それにしても願ってもない邂逅だな。まさかこんな形で会おうとは夢にも思わなかった。

はじめまして。連続猟奇殺人犯さん」

冷静に、言葉を選択して使用する。相手の能力が分からない以上、出来るだけ神経を逆撫でして瑣末な形で初見を迎えたい。

だがそんな僕の考えは、儚くも通じなかった。

静かに、緩慢な動作で彼は立ち上がった。片手は真紅の長爪めいたナイフを握り締める。

表情はいたって理性的だった。それを見て僕はたくらみが失敗だったことを悟る。

「仕方ないな。お前は冥花とは違うみたいでよかったよ。遠慮なく、殺せる」

そう呟く彼の瞳は、充血していて痛々しい。すでに狂っている  
としか思えない。

しかし遠慮とは舐められたものだ。僕としては殺意を持ってもらったほうが気が楽なのだ。

そう考えれば遠慮しないと云っている彼を殺すのはとても気が楽だ。

「それは、こっちの台詞でもあるね」

ひとまずそう呟いてから、ベルトに付けていたファイティングナイフをさつと抜く。特注品なのだろうか、その刃は市販のナイフより遥かに鋭い。

それを見た彼は僅かに顔をゆがめる。考え込むような表情の後、ずっとこちらに向き直り斜めに構えた瞳でこちらを見つめた。

どこか、救いを求めるような表情だった。

「お前だって俺と同じじゃないか。なあ、比島……」

言葉は余韻を持って打ち消された。後に続く言葉を発さず、彼は駆け出す。その姿は獅子のように力強く威厳があり、少し圧倒された。

……彼の言った事は否定しない。それはまがう事なき事実だから認めよう、でも何も苦ではない。彼と同じ殺人鬼でも、僕は当の昔に依存できる誰かを探し出しているから。

缶の中のコーヒーを飲み干し、彼の顔めがけて投げた。それが、  
戦鬪の合図。



彼が、言葉を何て続けようとしていたかは、少し先の未来で分かる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5085f/>

---

F E E L

2010年10月10日02時12分発行